

せいりょう園

[発行] 社会福祉法人はりま福祉会 特別養護老人ホームせいりょう園

〒675-0016 兵庫県加古川市野口町長砂 95-20 TEL 079-421-7156 FAX 079-421-6422

平成26年 8月 第162号 年間購読料1,000円(1部100円)

メール seiryoen@bb.banban.jp ホームページ <http://www.seiryoen.or.jp>

転機を迎える地域包括ケア—遺伝子を超える営みとして—

国会で『地域医療・介護総合確保推進法』が成立し、高齢者医療は病院完結型から地域完結型へと転換を図ります。その意図する処は、高齢者が地域の一員として人生を締め括り、家族や地域の人が看取る営みを支えること。其れが、次の世代に社会を引継ぎ、歴史をつなぐ営みとなります。

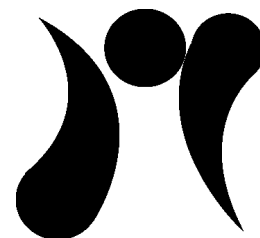
老いも若きも共に地域社会で暮らしながら、老いて完結する命を看取り、新たに誕生する命を迎えて、滑らかなバトンタッチが実現します。老いの最期を地域で看取る為には、医療と介護の連携と、家族や地域の協力が必要です。その為、地域包括ケアシステムの構築が求められています。

群で暮らす猿も象もライオンも、老いた個体は群を離れ、独り静かに土に還ります。其れが遺伝子で引継いだ、群を護る為の本能です。数ある動物の中で人間だけが、死に逝く命を群の中に受容れて看取り、弔い偲びながら、群を社会へと進化させて来ました。『看取りと弔い』の中に『遺伝子では伝わる事のない重要な何か』が存在する、と考える事が妥当な様に思います。

貧しい時代には姥捨てで家族と集落を護りながら、生産性を高めて集落の中で親を看取り弔うようになる過程で、思想や宗教が芽生えて拓がり、文化や文明を創り出し、科学・芸術を生み出しました。その過程が、単なる群を社会に進化させて人間性や社会性を磨き、更に発展させて、今に続いているのだと思います。約2000年続いて来た日本社会の歴史を途絶えさせる事無く、更に引継いで行く重要な役割を、地域包括ケアシステムが担います。同時に、その中核的な役割を担う地域包括支援センターの主たる活動についても、大きな転換期を迎えたように思います。

この40年間、少子化が続いて高齢化が急伸する一方の社会も、30年先には団塊の世代の大半が人生を締め括って、『更に大きな転換期』を迎えます。その時点でなお少子化が続いているなら、日本社会は確実に『消滅の危機』に直面する事になります。経済財政諮問会議では、50年後に1億人程度の安定した人口構造を目指すことを提案しています。それには、2030年までに

(次ページへつづく)



(前ページのつづき)

合計特殊出生率が2.07に回復する必要がある、と示しています。

40年続いた少子化傾向を大きく変化させて、滑らかなバトンタッチを実現するには、老いた命の完結と新たな命の誕生をつなぐ『意識と絆』を再構築し、『老いた命の社会的使命』を自覚することが必要です。その為には、『群の中で親を看取り弔う』という原点へ回帰し、『群から社会への進化』を再認識する事が重要です。それが地域包括ケアシステム構築の原点となるように思い、同時に、地域包括支援センター業務の方向性も示唆していると考えます。

地域で親を看取る為の連携と協力は、要介護期間と介護過程の話であり、その後は更に、弔い、偲ぶ、という人間のみが持つ精神的な営みへと続きます。地域包括ケアシステムが、遺伝子では伝わることのない『思想・宗教・人間性・社会性』を十分に発揮する営みとして機能するとき、団塊の世代が人生を締め括った後には、新たな命の誕生を待ち望む意識が地域社会に拡がっているのではないかと大きな期待を抱きます。ダウン症の子の誕生を歓迎する社会でもあって欲しい、と心より願います。

地域での『介護・看取り・弔い・偲ぶ』という一連の営みが、次世代の『妊娠・出産・誕生・子育て』を支える営みとなる様に、要介護の暮らしと介護についての様々な相談に応じ、資金的な面も含めて、調整する役割の『要』を地域包括支援センターが担います。

設置主体である行政と共に、社会福祉協議会や医療機関・介護事業者など関係機関と専門職が、未来を見据えた根源的な議論を重ねて、新たに生まれる子供達に滑らかに社会を引継ぎ、更には1000年先、2000年先にもつながる社会を創る役割と責任を果たしたい、と切に願います。

せいりょう園 渋谷 哲

「T氏の看取り」について

介護職員 衣笠 将弘

T氏は、平成25年秋ごろよりせいりょう園のショートステイを利用されました。ショートステイで入られた当初は老人車を押し自身でしっかり歩いていました。施設におられる頃、よく家の事や息子・娘の心配をいつもされており、周囲に気を配る心優しい方でした。

約一か月ほどたった頃の夜間帯に転倒され、右大腿骨を骨折しました。しばらくはトイレにいきたいと訴えが強く、骨折して無理であることを伝えても「いきたい!」としっかりと意思を示されました。本人の意思を尊重して、職員一人が前からT氏を抱えるように支え、もう一人はズボンをおろしたりと二人介助での対応を行いました。しかしとても立ってられないぐらいの激痛で無理ということを次第に本人も理解され、オムツ交換を拒否から受け入れてくださるようになりました。手術は高齢の為行わず、保存的治療で様子を見ることになりました。

しばらくは安静で寝たきりになっていましたが、やはり一日中ベッドの上で絶対安静な毎日では刺激が少なく、徐々に表情も暗くなっていきました。家人より一日一回でもいいので他の利用者の方が大勢いる食堂や、ショートステイ利用前はデイサービスを利用していたので、顔馴染みの方と談笑し、少しでも明るい表情で過ごす時間を作ってほしいという希望が

ありました。寝たきりになってから元気がなくなっていました。食堂でリクライニング車
上にて過ごしたり、食事はベッド上でなく起きて食堂で食したりするうちに、少しずつ表情
に明るさが戻ったように感じました。

痛みも薄らいでくると右大腿骨が折れていますが、柵を抜いてベッドの端に座っている時
もありました。本人の力強さを間近でみさせていただく場面でもありました。

しかし、徐々に食事量、水分量が落ちてきて、食べることに拒否が目立つようになりました。
そしてゆっくりではありますが、元気がなくなっているのが、日々のケアをさせて
いただいているときに感じました。

骨がくっ付いてきて、理学療法士の先生に診ていただき、家人もご本人も次は車椅子で過
ごすという想いになり、職員も本人と家人の想いを受けて一致団結し、スタート地点に立
とうとした矢先、平成26年4月7日に急変され夕方方には亡くなられました。

私はショート窓口を担当してから、初めて看取りをさせていただいたのですが、電話で
ご家族や医師への状態報告の説明が不十分に感じた事など対応が後手後手になり、自分の無
力さを痛感しました。ただ私自身は、T氏が旅立たれる瞬間に家族の方々が立ち会えた事
に対して「良かった。」と感じました。

T氏のケアで、相手の気持ちにたち、それをくみ取りケアに活かすという基本を、これま
で時間や業務におされ、どこかしらないがしろにしていた点があり、それを本人や家人から
教えていただきました。T氏の姿勢が傾いたまま食事を提供した事や、声のかけ方等様々な
指摘を受けて学ばせて頂きました。

今後この教訓をいかし、より良いケアに繋いでいけるように頑張っていきます。

7月24日(木) 12:30~12:53 ラジオ関西「ソトからラジオ」生中継 認知症予防1DAYスペシャル～認知症について考える日～



パーソナリティと共に施設長より発信



せりょう園利用者に突撃インタビュー

この日、ラジオ関西では、『認知症』をテーマに24時間放送していました。

世間での関心の高さの表れだと思います。

せりょう園からは施設長より施設の理念について、出来るだけ分かり易く説明しました。

そして認知症の方を介護しておられる御家族4名より、其々の視点を持って発言されました。

生放送で各自の持ち時間が決まっている為、皆さん発言には苦心されていたと思います。

でも伝えるべきことは伝えられていたと思います。

※詳細内容は、「ソトからラジオ」のブログに書かれています。



看取りを終えて、、、

～金品引渡し時、ご家族からの話～



ケアハウス施設長 入江 良行

先々月（機関誌 160 号）に、「せいりょう園に勤めて・・・現在の想い」を記載しました。その文中に、看取りを終えた家族からの話を少し書きましたが、その事について、もう少し詳しく触れたいと思います。

主任としてユニット型特養で勤務した際に、故人の通夜・告別式を終えて一段落したご家族と金品を清算する最後の時があります。相談員と共に金品の引き渡しを終了した後に、必ずご家族に「故人のせいりょう園での生活の振り返り」をして頂き、想いを述べて頂きます。その言葉は、せいりょう園に対する介護評価だと受け止めて私は聞き、話し終えた直後、忘れないようにパソコン入力していきました。

今回、4名の皆様の「振り返りの一部」を抜粋させて頂きたいと思います。

・初めの頃は、長男だから親の面倒を見なくてはならない。貧乏くじに当たったようなものという認識でいました。虐待まではしてなくても、言葉の暴力は自分でもあったように感じています。しかし、父親に関わる看護師・ドクター・介護職の皆さんの働き振りを見て考え方が変わりました。もっと真剣に家族として向き合わなければならないと思いました。そして、せいりょう園でお世話になり、皆さんの献身的な介護や看護に触れて、益々そう思いました。

ターミナル（終末期）については、細かい事まで質問させて頂きましたが、それに対してきちんと答えて頂き嬉しかったです。実際に父親のターミナルを迎えた時にも、そんなにうるたえる事なくいられたと思います。

・本当にせいりょう園でお世話になり感謝しています。ユニットでの職員さんの声かけや介護を見させてもらい頭が下がる思いです。若い職員さんが多いなか、とても献身的に介護していただき、義母も感謝していると思います。私自身ケアマネとして他の介護施設で働いているので、せいりょう園での介護で学ぶべき点多々ありました。

今年の春くらいから言葉を殆ど発しなくなり、反応も余り示さなくなり、その後ターミナルの診断が出ました。亡くなった当日の夜は、何か虫の知らせで私と義理の妹が泊まろうと前もって決めていました。本当に穏やかに苦しまずに本人は最期を迎えていました。ユニットで最期を迎えることが出来て良かったです。見送られる際、職員や入居者の皆さんが集まり、また葬儀にも沢山の職員の方に来て頂き嬉しかったです。ユニットのアットホームな雰囲気は凄く良かったです。有り難うございました。

・母は若い頃に夫を亡くして2人の息子を成人するまで、がむしゃらになって仕事してきました。苦勞が多く、何度も「一緒に死のう」と息子達に言いましたが、私たちが泣いて拒絶しました。晩年、せいりょう園で特にユニットに移ってから、笑顔が多くなりましたが、それは職員さんの介護の成果です。笑顔の写真と美人で穏やかな死に顔を見て強く感じます。ここで最期まで過ごさせて頂き本当に良かったです。

食べられない現状を見るときは、辛い事もあったけど、最期に向かっての準備をしていると感じました。職員の皆さんのターミナルケアに感謝しています。

・何か医療的なことをして治る状態ではないことは分かっていたが、何もせずに見ているだけでよいのか？という想いもあった。しかし、ユニットに来て、ターミナルの状態となり、息子・孫・曾孫と過ごした時間は貴重でした。曾孫(小学2年)は、亡くなった大きいおばあちゃんを見て、何か想うことがあったのか、画用紙に曾ばあちゃんのベッドに横たわる姿を描いていました。(「生きるために戦っている大きいおばあちゃん」との題名が付いていた。)

医療的な事も考えたけど、結果としては自然に亡くなっていく姿を見て感じるものがあつた。親族全員が感じるモノがあつたと思う。人生観も変わるような出来事でした。

せいりょう園で最期を迎えた故人のご家族からの想いの一部を載せさせて頂きました。介護や看取りに触れる機会のない人々からすれば、「何故そんな想いになるのか？」や「感謝のような言葉をいう人は、限られた一部の人だけではないのか？」と、もしかしたら思われるかもしれません。

しかし、ご家族として看取りに真剣に取り組んだ方々からは、大概、上記のような言葉を頂いています。何故でしょうか？

それは、『葛藤』したからだと思います。入居者は年齢を重ね、徐々に老衰して人生の終末期を迎えます。その姿を見るご家族は、昔の元気な本人を想い「昔のように元気な姿に戻らないのか？」と死を避けようとする努力をします。しかし、本人の生命力は、まさに風前の灯火です。医療行為などで無理に火を起こそうとしても本人が苦しむだけとなります。看取り経験をしている介護職・看護師・医師等が、チームワークを組んでご本人の状態説明を行い、ご家族に寄り添い、想いを傾聴していきます。

終末期に入っている入居者本人は、死を受容しています。飲食出来ない状態です。つまり、死に向かう準備期間となります。その準備期間は家族が理解する為の『葛藤の時間』でもあるのです。死を受容している本人から目を逸らさない家族は、職員と協働して寄り添い、看取りを行います。

入居者が亡くなられた際に、看取りを終えた直後のご家族は、様々な想いが混じり感情的にはなりますが、大きく取り乱す事は殆ど見られません。そして暫らく経過したのち、お話を伺うと、上記のような感謝にも似た言葉を頂戴します。

私達の仕事は、人生最期の看取りまで介護して、ご家族からの介護評価を聞きます。そして現在、生活している入居者やご家族へと「看取りを経験したご家族の『想い』」を繋げていく。本当に素晴らしい仕事であると強く誇りに感じます。

これからも、ご家族が『葛藤して…たどり着いた想い』を職員・地域の皆さんに発信していきたいと思ひます。

【せいりょう園待機者状況 平成26年8月8日現在】

○入所判定済み者 342人(グループの内)

Iグループ…113名 IIグループ…129名 IIIグループ…100名

※このグループ分けは、県の「入所判定マニュアル」に基づき、緊急性を評価して分けています。

Iグループが最も緊急性の高いグループとなっています。

判定後、状況の変化がありましたら、ご連絡下さい。

介護についてみんなで語ろう会（7月25日）



テーマ「認知症でも自由に街を歩きたい」

せいりょう園老人介護支援センター

社会福祉士 吉田 知一

7月19日に平成26年度の2市2町地域ケア協議会と2市2町グループホーム協会の総会がありました。記念講演会として読売新聞社の本田麻由美氏をお招きし「認知症でも自由に街を歩きたい」というテーマでお話していただきました。その後、意見交換会を行いました。恐縮ながら私がコーディネーター役をさせていただきました。その際に出た意見などを元に今回の語ろう会でも「認知症でも自由に街を歩きたい」をテーマに話合いました。

意見交換会について

この度のテーマのきっかけになる出来事として、愛知県大府市で2007年12月、徘徊の症状がある認知症の男性（当時91）が電車にはねられ死亡した事故をめぐり、JR東海が男性の遺族に損害賠償を求めた訴訟判決は、家族の監督義務を怠ったとし、介護に携わっていた妻と長男に720万円の支払いを命じるというニュースがありました。認知症の方は監視監督される存在である、ととれるような判決内容であり、また、自宅で介護している介護者にとっては監視監督することを求められ、在宅介護が今以上に窮屈に感じるような判決内容である、と思った方も多いのではないのでしょうか。

この裁判結果を聞いて思い出したのが、去年に神戸市で徘徊防止のため、訪問介護先の高齢者夫婦宅の玄関を3カ月以上、外からチェーンで施錠し外出できないようにしていたニュースでした。施錠を発案したのは担当のケアマネジャーだそうです。徘徊中の事故や近隣の迷惑を考えてのこと、虐待をしているという認識は無かったとのことでした。これは、「監視監督する」「安全に配慮する」ということをどう捉えるのか、という個々人の価値観や受け取る側の立場によって、「正しい」と思う視点が違い、見方によっては虐待や身体拘束として捉えられてしまう、ということです。

JR東海の事故の判決はもちろんのこと、今回のテーマである、「認知症でも自由に歩きたい」という内容は、一部の立場の方の一方的な話ではなく、様々な立場の方たちに「正しい」と思っている意見を出し合ってもらい、他人の価値観や考え方を理解し合う、ことを主に意見交換を行いました。200人以上の参加者がいらっしゃいましたが、聴講されている参加者にも発言出来るよう、壇上ではなくフロアで行いました。意見交換といっても漠然としてしまうので、三つのことについて皆様と話し合いました。

加古川の町で本当に認知症の方が自由に歩くことができるのか

はじめに、皆さまにお聞きしたかったのは、自分が認知症になってもまちを歩きたいか、です。結果、「歩きたい」と答えた方は半分ほどでした。つまり、半分は認知症になったらまちを歩きたくない、ということです。今回の主題になっているテーマでさえ捉え方はそれぞれで、価値観が違うもの同士が集まっていることが分かります。

私は、「認知症の方が自由に外を歩けるかどうか」、のポイントは見守る側の私たちが、どれだけ認知症の方を良い意味で放っておけるかだと思っています。このように書くと誤解を招くかもしれません。具体的に言うと、認知症の方とまちで出会った場合、「認知症である」というだけで、この方を保護しなければならない人、と決めつけていないか、ということです。実際に会場の多くの方は「放っておけない」と答えていました。見守りで重要なのは、認知症の方が徘徊中に困っているのか、困っていないのか、が重要なのであって、その人が認知症であるかどうか、外を歩けるか否かの基準で

はないということです。しかしながら、例え本人が困っていないと分かっている、放っておけないのが私たちの心情でもあります。今回は時間が限られていたので深く掘り下げることはできませんでしたが、何故放っておけないのか？誰の為に放っておけないのか？を考えると、また、違う視点で考えることができるのではないのでしょうか。

認知症の方が外を歩くということに対して私たちが思うこと

老人ホームなどの高齢者施設の多くは、日中でも玄関の鍵が閉まっています。具体的に言うと、入る際には自由に入れますが、出る時には手の届かないところに開閉のボタンがあるのが一般的です。その理由としては、防犯や安全の為である、と捉えることもできますし、利用者の方が外へ出て行かないようにしている、という捉え方もできます。ただ、施設の立場としては、認知症の方を外に出すということの、安全配慮義務や監督責任を問われることがあり、今回の判決内容は更にその傾向を強めるものになるのではないかと、思っています。実際にせりょう園のケアハウスの入居者の事例で、徘徊中に警察に保護された際に、「なぜ、認知症の方を外に出すのか？」と暗に施設の責任を求めるようなことを言われました。これも警察の立場からの、認知症の方が外を歩くことの認識が、私たちとの間に価値観のギャップがある為だといえます。ケアハウスは施設ではなく在宅であること、認知症の方を閉じ込めることが私たちの仕事ではないこと、認知症の方も私たちと同じ権利を持った人間であること、を話すことで理解し合える部分もあるのではないかと、という意見が会場からもありました。

家族介護の視点からは、「認知症の人と家族の会」兵庫県支部代表の河西美保氏からお話いただきました。自宅での介護のポイントとして、認知症の家族を介護していることを世間に隠さないこと、どのような症状があり、どんな状態なのかを知っていただくことで見守る側の見方も変わってくるのだそうです。ご本人が外出する機会が地域にご本人を知っていただく機会にもなっていたが、今回の裁判によって介護者である家族は、非常に窮屈な介護になってしまうのではないかと、懸念されていました。

ご本人が外を歩くという権利について

遠方に住む義母の介護をされている福田美紀弁護士に来ていただき、今回の判決を法的な立場からどう見えるのか、についてお聞きしました。介護者である妻や長男夫婦が介護を怠っていた訳ではなく、むしろ懸命に家族介護していたことが分かっているが、今回の判決は、あくまでも被害者であるJR東海を救済する判決結果になっている、とのことでした。民法714条には監督義務者の損害賠償責任について規定されており、本件はこの責任が肯定された、とのこと。更にJR側にも簡単にホームに入ることが出来てしまう設備環境については、JR側の責任があるとの指摘もされました。家族代表の河西氏からもありましたが、今後は個人の賠償責任ではなく社会で賠償していく仕組み、もしくは介護保険の保険内で保障する考えも必要ではないかと、という意見もいただきました。

最後の意見として、会場から「本人の権利や責任について触れられていない」と意見がありました。今回の裁判の結果として、認知症を患っている本人の権利や責任をどう考えるべきなのでしょう。私は、本人の自己責任は無いとされている今回の判決によって、認知症の方の一人の人間としての権利や責任が軽んじられないだろうか、ということをもっと懸念しています。なぜなら、認知症の方の人權を守ることが私たち専門職の本来の仕事だからです。自立支援とは何もご飯やトイレに行くことを自立できるように支援するだけではなく、一人の人間として自分の権利や責任を全う出来るように支援することも含まれているのです。

感想

素晴らしい講演をいただいた本田先生がディスカッションの締め言葉の中で、認知症の方の徘徊が放っておけない心情について「認知症を患っている方の人生は、その方の人生である、と考えれば私たちもそこまで気にならなくなる」とおっしゃっていました。

皆さんは他人の生き方を、自分のことのように主観的に捉えていないでしょうか。それは、時に自分の子供であり、認知症の親であり、もしくは、これから生まれてくるであろう命に対して、「あなたのことを思って」という言葉と共に自分の価値観を押しつけたり、コントロールしようとしてはいいのでしょうか。すべての人は生まれ落ちた瞬間から亡くなるまで人の助けがなければ生きていけません、その人の人生は誰のものでもなく、その人のものであると考えられます。

今の社会は、自分と他人、つまり主観と客観との境界線の曖昧さ、もしくは、自己肯定感の低さから、認めてもらいたいが為に依存しあう関係性が、生きにくい世の中を招いている、と考えます。自分自身が、個としての存在を認め自立し、境界線をはっきりさせることで他人との違いを尊重することに繋がるのではないかと考えます。認知症の方や障害者が一人の人間として住む、多様で寛容な肯定的な社会を目指す為に、まずは肯定的に他者を理解しようとする必要がある、と考えます。

【せいりょう園空き情報 平成26年8月13日現在】

- ① ケアハウス：空きなし（バス・トイレ・キッチン付24㎡）
- ② グループホーム：空きなし
- ③ グループホームまどか：空きなし
- ④ サービス付き高齢者向け住宅「リバティかこがわ」：2室
- ⑤ サービス付き高齢者向け住宅「自愛の家さくら」：空きあり

【問合せ先】 せいりょう園 TEL(079)421-7156/(079)424-3433

7月27日(日)第29回 せいりょう園 夏まつり



毎年恒例行事の夏まつりを開催しました。

今年も地域の皆様に支えられながら

天候にも恵まれ、無事に終える事が出来ました。

今回は、趣向を凝らしてみようと思い、職員が浴衣を着て、『恋するフォーチュンクッキー』を地域の皆さんと共に踊らせて頂きました。踊った後、「良かったよ。」と様々な方々から好評を頂きました。

来年も何か催し物を企画したいと思えます。